

日本天文学会昭和 56 年度秋季年会記事

昭和 56 年度秋季年会は京都市内の京大会館に於て、A B の 2 会場で 10 月 13 日 (火)~15 日 (木) の 3 日間 にわたって開催された。講演数は会場 A 89, 会場 B 85, 計 174, 出席者数約 360 名, 各セッションの座長は次の方々をお願いした。

	会場 A	会場 B
13 日 午前	横山 紘一, 若生康二郎,	杉本大一郎, 小田 稔,
午後	安田 春雄, 堀 源一郎,	加藤 正二, 藪 下 信,

14 日 午前	日江井榮二郎, 柿 沼 隆 清,	坂 下 志 郎, 高瀬文志郎,
午後	海野和三郎, 神野光男,	田中春夫, 会津 晃,
15 日 午前	上西啓祐, 山下泰正,	甲斐敬造, 高倉達雄,
午後	小暮智一, 川口市郎,	石田五郎, 北村正利,

会期中の 13 日の昼に内地留学奨学金選考委員会, 14 日夜に懇親会, 15 日の昼に理事会が開かれた。

学会だより

昭和 57 年度科学研究費補助金配分審査委員候補者

日本学術会議研究費委員会より標記の件について推薦の依頼がありましたので、本学会として評議員の書面投票により下記の方々を推薦いたしました。

第 1 段審査委員候補者: 藤本光昭, 奥田治之,
内田 豊

第 2 段審査委員候補者: 古在由秀, 海野和三郎

なお、現在の第 1 段審査委員は、加藤正二, 高窪啓弥, 小平桂一の 3 氏で、昭和 56 年度で加藤正二, 高窪啓弥の両氏が任期満了となります。又現在の第 2 段審査委員、川口市郎氏も昭和 56 年度で任期満了になります。

雑報

岡山観測・技術シンポジウム報告

光学望遠鏡計画の議論のさなか、7 月 23 日からの 3 日間、日本の光学天文観測の芽を育み支えてきた岡山天体物理観測所のある鴨方町の町民会館において、第 2 回目の岡山観測シンポジウムが 9 年振りに開催され、引き続き第 1 回目の技術シンポジウムが同じ会場で行われた。光学観測に携ってきた関係者約 70 名の参加があった。

第 1 日目ははじめに光学観測の現状の紹介 (山下), 岡山観測所の生い立ちと 22 年間の発展の記録 (石田五郎), 光学と天文学の接点その展望という補償光学・画像修正を主とした招待講演 (辻内), 望遠鏡の制御に関して (清水 実), 国内外における鏡の軽量化への足跡の紹介 (富田) があった。午後からは、本観測開始以来の

188 cm ニュートン観測の詳細な紹介 (高瀬), 岡山の天候 (石田五郎), 二次元撮像のための CCD カメラ (家), 低分散分光用のグリズム分光器 (高田), 光ファイバーの応用 (小平) などの講演に始まり、カセグレン焦点の観測では I.L. 分光器を用いた観測 (若松), ポラリメータを含んだ多チャンネル分光計 (沖田), 91 cm 望遠鏡における UVB 測光とスキヤナの観測 (近藤), ISIT を用いた天体撮像とそのビデオの公開 (磯部), があり、瀬戸内の風で蒸し暑い午後 7 時まで講演が続いた。

2 日目は、IDARSS の分光観測への応用についての岡山の実験 (渡辺), 東北大の観測と実験 (田村, 石井), 銀河観測用新分光器の設計 (岡村, 清水実) があり、クーデ焦点での分光観測の推移 (山崎), 高分解能高効率化の提言 (定金), 世界に先駆けた高分散エッジル分光の現状 (辻), フーリエ分光器による赤外観測 (田中), クーデ分光器用リチャードソン型イメージスライサー (山下), ステラー・マグネットグラフ計画 (成相), スペックルとファブリ・ペロー干渉計の紹介 (安藤) が行われた。

各種センサーの冷却システムの確立, 新検出器の応用, クーデ室拡大による高分散分光の充実, 広がった天体用のカセ新分光測光器, 蓄積型モニター及び TV ガイダーなど多くの機器開発が望まれるとの総括 (家) をもとに討論が行われて終了した。

引き続き技術シンポジウムにおいては、技術者のための天文学解説と観測天文学の展望について、世界の望遠鏡 (磯部), 望遠鏡の技術的諸問題 (清水実), 銀河の光学観測 (家), 星の観測 (安藤), 写真測光と画像処理 (岡村) の特別講演が行われた。

3 日目は観測機器開発を行っている現状を、堂平観測所多色偏光装置の TV ガイダー (山口), 岡山で計画

のガイドシステムと太陽クーデ望遠鏡で撮影した太陽フレアのビデオ公開 (乗本), 岡山 91 cm 望遠鏡の計算機制御 (沖田), 188 cm 望遠鏡の指向精度解析 (湯谷), 105 cm, シュミットの光学テスト (征矢野), 光干渉計の実験 (野口本和), レーザー測距装置の改良 (小林), 三鷹 30 cm 望遠鏡と測光システム (佐藤英男), 夜光観測のための星消去式光電測光器 (宮下暁彦), 光電測光における直流増幅と光子計数法 (三上), IDARSS と岡山の測光システム (渡辺), 三色同時測光 (清水康広), 岡山のイメージチューブの特性 (岡田), 木曾における超増感 (青木), 微小変位計の応用 (小矢野), モデル 5000 AP を用いた TV 画像処理 (西野), 大宇陀観測所の現況 (辻村), 木曾観測所で進行中の技術的プロジェクト (野口猛) の報告があった。

急速に進む技術革新の流れの中での光学観測の充実・レベルアップに向けられた関係者の熱意と着実な努力の蓄積の様子が, 両シンポジウムを通じて, よくうかがわれた。

旅費の援助を戴いた小暮・高窪・小平の各総研と会場の世話をして戴いた町民会館・岡山観測所の方々には厚くお礼申し上げたい。(野口 猛・家 正則)

「激変星と関連星」研究会報告

去る2月24, 25日の両日, 京都大学理学部宇宙物理学教室において, 上記研究会が開かれ, 国内各大学・研究所から50名以上の研究者が集まり, 熱心な討議が行われた。

激変星 (cataclysmic variables) は4種に大別され, 新星 (novae), 回帰新星 (recurrent novae), 矮新星 (dwarf novae) および新星状変光星 (nova-like variables) がある。その他, 最近注目されているものに, AM Her を代表とする polars と呼ばれるグループがある。

これらの激変星に共通していることは, いずれも短周期の近接連星であり, 伴星が臨界ロッシュ・ローブを満たした晩期型矮星で, 主星は白色矮星ということである。白色矮星のまわりには, 伴星から流れ込んだガスが accretion disk をつくり (polars では円柱), ここから強い UV 輻射などが出ている。

研究会では, 光, UV, X線, 電波の各波長域での観測資料をもとに, 活発な議論が展開され, 激変星に関する総合的な理解を深めることができた。講演内容の詳細は集録にまとめられている。

集録はまだ残部がありますので, ご希望の方は300円 (切手でも可) 同封の上, 下記へ申し込んで下さい。

〒181 東京都三鷹市大沢 2-21-1

東京天文台 北村正利

(山崎篤磨)

丸善の出版書

理科年表

57年版

東京天文台 編・A6
定価 920円

●57年版では

気象部の統計値が(気象庁資料の10年毎の改訂による)すべて新しくなるほか, 地学部的人口, 面積, 土地利用などのナショナルデータが55年実施の国勢調査をもとに大きく変わります。天文部でも銀河構造の解明の基になるデータ, 惑星の諸性状数値などが新たに加わりました。

★理科年表データのバックグラウンドを易しく解説する, 新しいタイプの科学読本

理科年表読本 **気象と気候**

高橋・宮沢 著/B6/定価1,200円

理科年表読本 **地震と火山**

宇佐美・木村 編著/B6/定価1,200円

理科年表読本 **こよみと天文・今昔**

いまむかし
内田正男 著/B6/定価1,200円

丸善 出版部

[〒103] 東京都中央区日本橋3-9-2
第二丸善ビル ☎(03)272-0331